伊藤整全集

第一巻

伊藤整全集

1

新潮社版

雪明りの路・冬夜 他

定価二〇〇〇円

昭和四十七年六月十日 印刷
昭和四十七年六月十五日 発行

著者 伊藤整

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社
東京都新宿区矢来町七一 電話
東京二六〇一一一一 郵便番
号一六二 振替東京八〇八

印刷所 株式会社精興社

製本所 株式会社大進堂

伊藤整全集
—1—

© Sadako Itō
1972. Printed
in Japan.

乱丁，落丁本
はお取替えい
たします。

伊藤整全集 第1巻 目次

〔詩〕

「雪明りの路」

「雪明りの路」序　二〇
春日　二二
暗い夏　二二
雨の来る前　二三
雨　二三
十字街　二四
風　二四
女　二四
梅ちゃん　二四
夜まはり　二五
夏の終り　二五
白い障子　二六
秋　二六
瓜姫　二六
春を待つ　二七
電信柱　二七
その夜　二八
霜の朝　二九
雪の夜　二九
十一月　三〇
雪明り　三〇
餅をつく　三一
夜　三一
私は甲虫　三一
春の夜　三二
少年の死んだ日　三二
夕方　三三
雪解　三三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

夕方　三四
春　三四
あけ方　三五
顔　三五
春宵　三六
街で　三六
馬　三六
社会　三七
糧を求める　三七
過敏　三八
思想　三八
言葉　三九
気軽さ　三九
逃れる　三九
Anton Tchekhoff.　四〇
幕合　四〇
京都　四一
忍路　四一
Yeats.　四二
葡萄園にて　四三
秋の恋びと　四三
青葉の朝に　四四
池のほとり　四四
月光　四五
山に来た雪　四五
深夜の絵　四六
十一月　四六
雪の来る朝　四七
雪の夜解散する群集　四七
山鳴り　四八
凍てついた夜　四八
冬の詩三篇　四八
ひとりで思ふ　四九
四月の暖い夜　五〇

果樹園の夜　五〇
悪夢　五一
日ざし　五一
丘の乙女　五二
小樽は祭　五二
ひとしから　五三
夜明け　五三
良い朝　五四
あやまち　五四
月は銀　五五
小樽の秋　五五
夜の霰　五六
雪夜　五六
故郷に目ざめる　五七
昔の室　五七
雪の夜も　五八
月あかりを窺ふ　五八
目覚めてはいけない　五八
発熱　五九
雪あかりの人　五九
吹雪の街を　六〇
雪の朝　六一
春　六一
病　六二
ひとしから　六二
寿に　六三
林に来て　六三
楽しい夜道　六三
落葉松の風　六四
ひとりしづか　六五
あなたは人形　六五
蕗になる　六六
悪い蛙　六六
月夜を歩く　六七

林檎園の月　六七
また月夜　六八
かんこう　六八
林檎園の六月　六九
憂鬱な夏　六九
山へ　七〇
夏になれば　七一
九月　七一
女性は笑ふ　七二
大事な私　七二
世間の顔　七三
世間の顔　七三
笑つてはならない　七三
面倒な言葉　七四
だまつてゐると　七四
あいつら　七五
頑なさ　七五
見ざる・聞かざる・言はざる　七六
みんなの分まで　七六
野の風　七七
目覚め　七七

「冬夜」

霧の中　八一
雨　八一
朝　八二
もう一人の私　八三
ふるさと　八三
病む父　八四
海の捨児　八五
弟の日　八六
いま帰れば　八六

林で書いた詩　八七
風を見る　八七
後の日に　八八
海の少女に　八八
冬夜　八九
田園故郷を失ふ　八九
朝　九〇
盲唖学校通　九一
父　九二
雪を待つ　九二
もう一度　九三
春夜　九三
月夜にめぐり逢ふ　九三
緑の村　九三
冬夜覚書　九五

拾遺・草稿詩篇

〈定本「伊藤整詩集」より〉

林　九八
緑の循環路　九八
猿　九九
○
鳴海仙吉の詩　一〇〇

〈未刊詩篇〉

寒き夜　一〇一
荒れた晩に　一〇一
雪の夜　一〇四

静物　一〇五
悲しかりし日に　一〇六
骨牌の占ひ　一〇六
私を刻む　一〇七
縫物をする人へ　一〇七
地上に　一〇八
詩にかへる　一〇九
雪　一一〇
願ひ　一一〇
雪夜の場末で　一一〇
母娘　一一一
風　一一三
三人　一一三
二階の姉妹　一一三
牧場で書いた詩　一一四
南京の感情　一一四
Aの語つた話　一一五
支那蕎麦　一一五
北方　一一六
心臓　一一七
青函丸　一一七
言葉　一一八
雲雀　一一八
緑　一一九
忘却に就いて　一一九
橡の葉と昆虫　一二〇
赤い吃水線　一二一
村にて　一二三
川崎くら子夫人を葬る詩　一二三
遠い明治のお正月　一二三
〈訳詩〉
窓（カール・サンドバーグ）　一二五

途を失ふ（カール・サンドバーグ）　二五
不器用者（アミイ・ロウエル）　二五
私は風（ゾイ・エイキンズ）　二五
松（ネルソン・アントリム・クラフォード）　二六
ポプラ（同）　二六
劇場（ジョン・グウルド・フレッチャア）　二六
昔の子供部屋（同）　二六
舞踊（ポオル・ヴァレリイ）　二七
ダイヤの女王（ポオル・エリュアール）　二七
墓碑銘（ウォルタア・デ・ラ・メア）　二八
馬上のひと（同）　二八
夢の唄（同）　二九
アラビア（同）　二九
ワイトチャヴル街（リチャード・オルディントン）　三〇
落日（同）　三三
母音（ジョン・グウルド・フレッチャア）　三三
スケイタア（同）　三三
ロンドンノ宵（ジョン・グウルド・フレッチャア）　三三
私の唇の触れた唇（エドナ・セント・ヴィンセント・ミレイ）　三三
私を憐むな（同）　三三
私は帰らう（同）　三三
Sonnet（イ・イ・カミングス）　三四
肖像（同）　三四
日没（同）　三五
唄　（同）　三六
急行列車（ユウジン・ジオラス）　三七
（いますこし前へ）（イ・イ・カミングス）　三八
若し私が君を愛せば（同）　三八
愛について語り（同）　三九

〈詩稿ノート　I　一九二二年〉

まつり　四〇
星の夜　四〇

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

(岡に立ち並ぶ) 一四一
春日小曲 一四一
六月の朝 一四二
明るい雨 一四三
ある日の友情 一四三
(あゝ一つの魂の) 一四三
さびしき母の歌 一四四
(此の夜) 一四四
雨 一四五
雨 一四五
尼 一四六
夜の都会で 一四六
短章より 一四七
(時は夕ぐれに) 一四七
(母となる寂しさ) 一四八
月の出 一四八
(友と話して) 一四九
(あなたが清く) 一四九
(泣けよ) 一五〇
山せ 一五〇
海で 一五〇
ある日の願 一五一
子守唄 一五二
(夜中に目を) 一五二
子守唄 一五二
まり 一五三
電信柱 一五三
青い大根 一五四
秋 一五四
(さびしい海岸の) 一五五
(茶ぶだうが) 一五五
(愚かよな) 一五五
ある日 一五六
未完成の詩 一五六

二人の死　一五七
短詩 三　一五八
風、夜、広野　一五八
（あかるい青空）　一五九
（はんてんを）　一五九
（汽笛が）　一六〇
雪のくる日　一六〇
冬きたる　一六〇
＊
山鳩のお話　一六一
ふるさとの春　一六一
少年秘曲　一六二
愛の小曲　一六三
初夏　一六三
（彼処に）　一六四
涙　一六五

〈詩稿ノート II 一九二三年〉

吹雪のくる宵　一六六
切り通し　一六六
吹雪の日　一六七
魚をこしらへる女　一六七
（ある少女に）　一六八
（ね　ぴんと黙りなさい）　一六八
小樽　一六八
春がくる　一六九
（弟が泣く）　一六九
（棚も見える）　一七〇
雪ばれ　一七〇
（すべてを）　一七〇
赤子に　一七一
憂鬱　一七一
窓で　一七二

春の街　一七三
（木々）　一七三
笹　一七三
留守　一七四
生ひ立ち II　一七五
ほろし　一七五
桶屋さん　一七五
雨　一七六
晩春　一七六
男　一七六
春　一七七
春の森　一七七
夕方の風景　一七八
（ゆうちゃん）　一七八
山鳩　一七八
井戸で　一七九
（姉は）　一七九
（それは）　一七九
（草の芽の）　一八〇
（何といふ）　一八〇
（若い頃）　一八〇
（提燈が一つ）　一八一
春暮　一八一
（この明るい）　一八二

〔短　歌〕

或る日　一八四
雨　一八四
この心　一八四
街の歌　一八四
弟病める日　一八五
朝の歌　一八五

〔詩　論〕

外在律と内容　一八八
詩を日本語と社会へ　一九〇
ルナ　一九三
一九二八年の詩壇　一九五
詩題と情緒の訂正　二〇〇
形式のこと　二〇三
純粋詩　二〇五
詩集「戦争」　二一四
切手売場の Jean Giraudoux　二一五
海・アメリカ・詩　二一七
人間のある詩論　二一九
「文学界」に拠れる詩人　二二一
「路次ぐらし」と「詩作法」
女艸会洋画展　二二五
西脇順三郎氏の場合　二二八
「詩の周囲」　二三一

〔短篇小説〕（大正13年～昭和11年）

庭造りの話　二三四
丘　二三九
長田とT先生　二四三
狐の話　二四六
睡り羊　二五一
飛躍の型　二五五
鸚鵡　二五八
パルナス座　二六三
繭　二六七

錯覚のある配列　二七二
夢のクロニイク　二八五
送還　二九〇
感情細胞の断面　二九七
皮膚の勝利　三〇四
アカシアの匂に就て　三二
潜在意識の軌道　三二
隠しっこなし　三三〇
蕾の中のキリ子　三三三
機構の絶対性　三四三
ブノアの発見　三五六
M百貨店　三六一
プラタアヌと脚　三七一
緑の崖　三七四
海の肖像　三七七
循環　三八九
生物祭　三九七
月光と蔭に就て　四〇五
憎悪に就て　四一三
イカルス失墜　四三三
仮面　四三五
宇津の死　四四四
宇津の手記　四五三
夜の序　四六〇
姉妹　四六七
斑点　四七三
風物　四八五
撫でられた顔　四八九
傷痕　四九九
老婆　五一三
男の間　五一四
馬喰の果　五二一

憑きもの　五四一
顔　五四七
石狩　五五〇
葡萄園　五六九
*
木馬社版「雪明りの路」について　五七七
初版「冬夜」序　五八二
定本「伊藤整詩集」あとがき　五八三
〈追補〉　五八五
*
編集後記　瀬沼茂樹　五八七

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.